地区安全特集：南シナ海が臨界点に接近

漢和防務評論 20160703 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

南シナ海問題で、国際仲裁裁判所の判決が出ました。予想通り、妥当な判決と言えるでしょう。

これに対して中国はどう出るか？中国は、国際世論を敢えて無視し、政府高官などがヒステリックに認めないと叫んでいます。中国のこの姿勢を見て、やはり大国、一流国としての見識は未完成であると誰もが感じたことでしょう。

中国は、自ら非を認めたことに気付いていないことから、末端部隊が不測の行動に走る可能性もあります。

今後指導者習近平がいかに対応するか見物です。

KDR クアラルンプール KHOO JIN KIAT 特電：

最近2年間の南シナ海の主権争いは、次の4つの問題に集約される。すなわち、①フィリピンの南シナ海問題の仲裁裁判所への提訴、②中国の人工島造成問題、③中国の南シナ海島嶼の軍事基地化、及び④米国による飛行と航行の自由の実践である。以上の4つの問題は、2014年から現在までの2年間、先鋭化し激化しつつある。国際仲裁裁判所は、今年の中旬フィリンに対し裁決を出す準備をしている。仲裁の結果は、南シナ海の情勢を大きく変化させるであろう。中国は、仲裁に参加せず、仲裁を受け入れないと主張しているが、一旦中国に不利な結果が出れば、中国は必ず報復に出るであろう。

しかもこの2年間、南シナ海を航行する軍艦の活動は、日本海上自衛隊による数度にわたる東南アジア国家訪問を含めて、激増しつつある。今のままでは暴発の臨界点に達するであろう。今年初めの3ヶ月間は、南シナ海で毎月様々な問題が発生した。1月は”中国軍の南シナ海永暑礁での試験飛行及び離着陸試験”及び”米国軍艦の西沙中建島（トリトン島、中国はベトナム及び台湾と領有権争いがある）進入”事件である。

2月は、中国が西沙に防空ミサイルを配備し軍事基地化した。3月は、中国とフィリピン間で五方礁（南沙、JACKSON ATOLL）問題が発生した。この間、台湾総統馬英九が南沙の太平島を訪問した事象は問題に含めていない。

KDR の南シナ海関連ニュースデータを見ると、2016年1月の関連ニュース数が140件であったのが、2月には155件に増えていた。

現在の南シナ海の緊張状態は、3つの段階に分けることが出来る。①中国が人工島造成行動開始後、フィリピンが国際仲裁裁判所に提訴し2014年の”多事の秋”に

入った時期：②2015年、中国の人工島軍事基地化の連鎖及び米軍の航行と飛行の自由作戦により南シナ海が”緊張状態”に入った時期：③2016年以降。2016年に入っても南シナ海は引き続き緊張し緩和の動きは見られない。

2016年に南シナ海が危機を迎えることは予想された。注意すべきことは、緊張時期から危険な時期に転じる時期に、南シナ海では（2015年から）軍事艦艇が頻繁に活動し始めたことである。この時期、日本海上自衛隊の全部で4艘の護衛艦及び3艘の掃海艦は、2015年4月、5月及び9月の3度フィリピンを訪問した。同年5月、日本海上保安庁の艦船がフィリピンを訪問した。

日比両国は、2015年6月、P3C対潜哨戒機による聯合軍事演習を行った。同年5月、海上保安庁の艦船は、ベトナムを訪問した。同年7月、日本のP1型対潜哨戒機はシンガポールに入った。2015年8月、海上自衛隊の2艘の艦艇がマレーシアを訪問した。

2015年8月と10月、インドの沿岸警備隊及びインド海軍は、ベトナムを訪問した。引き続き、11月1日、インド海軍は、フィリピンを訪問した。

2015年、オーストラリア海軍は、徐々に活動を開始した：同年8月、オーストラリア海軍の潜水艦 HMAS DECHAINEUX 号は、マレーシアの沙巴にある海軍潜水艦基地を訪問した。引き続き9月、オーストラリア海軍の潜水艦 HMAS SHEEAN 号はマレーシア半島北部を訪問した。その後、潜水艦 HMAS DECHAINEUX 号は、10月に、マレーシア海軍と南シナ海で潜水艦による聯合演習を行った。このほか、オーストラリア海軍護衛艦は、9月、10月及び11月に順繰りにマレーシア、ベトナムを回り、再びマレーシアに戻った。

欧州国家は、フランス海軍が2015年11月、ベトナムを訪問した。

以上の艦船の活動には一つの共通点がある。訪問した国はみな南シナ海紛争の当事国である。またここでは米軍艦艇の活動、及び米軍がシンガポールにP-8対潜哨戒機を配備した問題には触れていない。

今年初めの3ヶ月、南シナ海周辺の軍事活動が活発化するなか、2月15日、フランス海軍 FNS PROVENCE とマレーシア海軍艦艇は、初めて南シナ海で聯合対潜演習を行った。演習は3日間であった。

2月17日、日本海上自衛隊の3艘の軍艦がカンボジアを訪問し、また2月18日にベトナム中部に2機のP3Cを派遣し、ベトナム海軍と海上捜索図上演習を行った。さらに2月25日、海上自衛隊の3艘の軍艦がマレーシア海軍の沙巴基地を訪問した。

引き続き、3月2日、海上自衛隊の2艘の掃海艦がフィリピンを訪問、その後3月12日、マレーシアを訪問した。近々、日本は潜水艦をフィリピンに派遣する準備をしている。日本のこの行動は明らかに南シナ海での存在感を高めている。中国は、直ちに、日本が再び軍事的に南シナ海に進出しようとしていると警鐘を鳴らした。以上の関連事態の発展を総合的に見ると、中国の態度が強硬になり始めていること

が分かる。中国の外交部長王毅は：南シナ海の”航行の自由”は”横行の自由”ではないと警告した。中国はさらに日本の潜水艦がフィリピン訪問の準備をしていることに警告した。日本の海上自衛隊が南シナ海で活動すること及び米軍が南シナ海で活動することを停止させることはできない。しかし南シナ海の緊張は高まる。このように南シナ海での活動が集中することは、南シナ海の緊張が高まる。さらに仲裁裁判所の判決がもたらす潜在的圧力の下、南シナ海は暴発の臨界点に達する。

これらの状況の下、南シナ海に関わる各国は海上での衝突事件を厳に防止しなければならない、と **KDR** は考える。

KDR は、仲裁裁判所の判決がもたらす圧力を排除するため、或いは南シナ海で国際的な立場での同情を得るため、某一方がさらに激烈な政治、外交摩擦を引き起こし、自国の利益獲得に向かうことがあり得ると考える。

最後に、中国と米国の両陣営は、南シナ海の争いで依然として”節度ある姿勢”を保っているが、今年 3 月、1 艘の中国海軍電子偵察船が南シナ海で米国空母編隊を追跡した写真は、この姿勢が随時破棄される可能性があることを証明している。この写真は、2001 年の米中軍用機の衝突事件を思い起こさせた。そして如何なる争いも、最後は随時極端に走り、どのような事件が発生するか誰も予測できない。南シナ海は現在、暴風雨の前夜にある、と **KDR** は考える。

以上